審査様式２－１

氏名（本籍）	関　昭宏（茨城県）
学位の種類	博士（医学）
学位記番号	博甲第　7019　号
学位授与年月	平成２６年　３月２５日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
審査研究科	人間総合科学研究科
学位論文題目	労働者の首尾一貫感覚に影響する要因の労働衛生学的研究

主　査	筑波大学教授	博士（保健学）	市川　政雄
副　査	筑波大学教授	医学博士	高橋　祥友
副　査	筑波大学教授	博士（医学）	前野　哲博
副　査	筑波大学准教授	博士（保健学）	大橋　順

論文の内容の要旨

（目的）

近年、労働者のメンタルヘルス対策における一次予防の重要性が高まり、Antonovsky が提唱した健康生成論の中核概念である首尾一貫感覚（Sense of Coherence：SOC）が注目されてきている。SOC はストレス対処力を反映するとされ、先行研究により SOC が身体的健康度及び精神的健康度と密接な関連を有することが明らかとなっている。そのため、SOC を高めることは労働者の心身の健康の保持増進に大きく貢献すると考えられる。

成人期の SOC の形成においては、心理境的職場環境が重要であるとされているが、SOC と心理社会的職場環境の関連については一定の結論が得られていない。また、Antonovsky は、SOC は成人期以降安定し変化しにくいと述べているが、経時的に変化するといった報告もあり、結果は一致していない。

そこで、本研究では、労働者の成人期の SOC の経時的変化、及び SOC と心理社会的職場環境の関連を明らかにすることを目的とし、縦断調査と横断調査を実施した。両調査を通して、近年、本邦において検討がなされている労働生産性の向上と労働者の精神的健康の改善を両立する積極的な職場のメンタルヘルス対策である一次予防を、さらに効果的に推し進めるための知見を得ることを目的とした。

（対象と方法）

・縦断調査

某グループ企業の職員を対象に、2005 年から 2012 年の 8 年間縦断調査を実施した。調査は毎年 1 回実施した。質問項目は基本属性のほか、職業性ストレス簡易尺度（Brief Scales for Job Stress : BSJS）と SOC とした。8 回の調査全てに回答が得られた 324 名のうち、解析項目に欠損値のない 214 名を解析対象とした。

SOC の経時的変化を明らかにするため、8 年間の SOC を被験者内変数として属性別に反復測定分散分析を行った。次に、2005 年時の SOC 得点で 5 群に分け、同様に解析を行った。

SOC と心理社会的職場環境の関連を明らかにするため、SOC 変化量で 2 群に分け（上昇群、低下群）、BSJS の比較を行った。さらに、2005 年から 2012 年の BSJS の平均値を独立変数、2012 年の SOC 得点を従属変数とする重回帰分析を行った。

・横断調査

筑波研究学園都市の労働者 21,922 名を対象に、2011 年 11 月に WEB 調査を実施した。質問項目は基本属性のほか、BSJS、SOC とした。回答の得られた 9,528 名のうち、20 歳から 59 歳の 9,088 名を解析対象とした。

まず属性別に SOC を比較した。次に、共分散構造分析を用いて BSJS が SOC に影響を与えるというモデルを構築し、解析を行った。さらに、同モデルについて多母集団同時分析を行った。

（結果）

・SOC の経時的変化について

縦断調査結果より、全体、男性、女性、各年代の SOC に有意な変化を認めなかった。職位別では、非管理職群と複数回変化群においては有意に変化し、それぞれ点数は上昇、低下していた。また、SOC 得点別では、最低群のみ有意に変化し、点数は上昇していた。

・SOC と心理社会的職場環境の関連について

縦断調査結果より、SOC 上昇群は低下群と比し、量的負荷、質的負荷、対人関係の困難が有意に低く、裁量度、達成感、同僚・上司の支援が有意に高かった。また、重回帰分析より、現在の SOC に、数年前から現在の質的負荷、対人関係の困難が負の影響を、達成感が正の影響を与えることが明らかとなった。

横断調査結果より、心理社会的職場環境が SOC に影響を与えるというモデルが成立し、多母集団同時分析より、性別、年代、職種、職位のいずれの集団においても同モデルが成立することが明らかとなった。

（考察）

・SOC の経時的変化について

非管理職群の SOC は 8 年間で有意に変化し点数は上昇していた。これはソーシャルサポートが得られやすく、過小負荷と過大負荷のバランスの経験という SOC の形成に重要な良質な人生経験が得られたからではないかと考えられた。複数回変化群の SOC は 8 年間で有意に変化し点数は低下していた。これには職位が不安定で職務保障が得られず、ソーシャルサポートが得難かったことによると考えられた。

・SOC と心理社会的職場環境の関連について

Antonovsky の説や先行研究と同様に、心理社会的職場環境が SOC に影響を与える可能性が示

唆された。量的負荷、質的負荷は過小負荷と過大負荷のバランスの経験、裁量度はそれに加え意思決定への参加の経験、対人関係の困難、同僚・上司の支援はソーシャルサポート、達成感は仕事上の喜びと誇りという良質な人生経験や職場環境に繋がっているからだと考えられた。

以上より、心理社会的職場環境を良好に保つことはSOCの向上を介して、労働者のストレス対処力の向上、さらには労働者の心身の健康の保持増進につながると考えられた。

審査の結果の要旨

（批評）

労働衛生におけるメンタルヘルス対策はますます重要になってきており、その一次予防においては個人のストレス対処力を培うことも大切である、というのが本研究の基本的な考えである。そこで、本研究ではストレス対処力を反映する首尾一貫感覚（SOC）という指標に着目し、その経時的変化と職場環境との関連を、比較的長期にわたる縦断調査と大規模集団を対象とした横断調査で検討した。これまでのメンタルヘルス対策ではストレッサーに着目し、二次予防が中心であったが、本研究では個体側要因にも光を当て、一次予防に資する知見を供した点で評価できる。

平成26年1月14日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士（医学）の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。